

中排泄形、最終代謝物である Estriol は向子宮内膜作用弱くその反面向腔作用が比較的強い為 Estrogen of Vagina と呼ばれ Puck, Unger 等により検討され月経困難症、頸管炎、外陰掻痒症、更年期障害等に有効であることが報告された。

我々は腔炎、子宮頸管炎及び子宮腔部糜爛の患者約100名につき Estriol 500 γ 含有のエストリール錠を毎日1回1錠宛約1週間にわたって使用し認むべき好成績を得た。腔分泌物の細菌検査によりトリコモナスを発見したものはトリコフロン腔坐薬との併用を、亦グラム陽性球菌を多数証明したものにはペニシンC錠との併用を試みその他のものについてはエストリール錠単一療法を実施し自覚症状、腔内清浄度、腔内pH、帯下の量等を追求した。

治療成績は

I) 腔炎 50例の内訳は非特異性腔炎25例、トリコモナス腔炎8例、老人性腔炎17例で全例に帯下の減少乃至消失を認め、腔粘膜発赤の軽快消失及び掻痒感も殆んどが消失した。腔内清浄度は約80%に於て明らかに好転し、全例に於て白血球数の減少、腔内雑菌の減少をみとめた。腔内pHも全例に於て好転した。

II) 子宮頸管炎20例については全例に帯下の減少乃至消失を認め、腔内清浄度及び腔内pHの好転がみられた。

III) 子宮腔部糜爛30例については約80%に於て糜爛面が全く消失治癒し、約20%についても糜爛面は著明に減少し之に伴い出血乃至血性帯下は全く止まった。

IV) 本錠使用による副作用は全例に認められなかった。

53. (演) Estriol の臨床効果 特に子宮腔部糜爛並に分娩時子宮頸管に対する作用について (第1報)

(武蔵野日赤) 犬塚 俊夫

1) 子宮腔部糜爛に対する治療成績

Estriol が選擇的に腔及び外陰の粘膜(重層扁平上皮)に作用することが、この部の重層扁平上皮の治癒機転を促進するとの論点より Estriol 製剤を外來組織診で悪性腫瘍を否定し得た子宮腔部糜爛患者200名に使用した。投与方法は経口投与例、皮下注射例、局所注射例、腔錠投与例、腔内ザルベ塗布例、の5群に分けてこの臨床効果、病理組織学的追及、頸管粘液量、腔内pH値に及ぼす影響等につき追及を行つた。

2) 分娩時子宮頸管に対する作用

妊娠末期に著明に増量する Estriol が骨盤床、頸管、腔を柔軟化しひいてはその伸展性を増加せしめる作用があると思われ、他方 Estriol の消長を知ることは胎盤機能の一つの示標となると考えられる。以上の論点より Estriol と分娩との関係を究明し、即ち胎盤機能との関連が考えられる分娩予定日超過患者に対して Estrogen 尿中排泄量の測定を行い、更に Estriol を大量投与し、分娩時頸管開大作用、及び子宮頸管組織像におよぼす影響を検索した結果、Estriol が分娩時の頸管開大に対して有意義なる作用を有することを認めたのでここに報告する。

54. (演) 抗原虫性物質の腔トリコモナスの解糖能並びに呼吸に及ぼす影響に関する基礎的研究

(京府医大) 青河寛次, *松下光延

腔トリコモナス(以下T, V,)感染症の難治、再発性にかんがみ、近年幾多の抗原虫性物質が発見され、且つ臨床に應用されているが、しかし之等薬剤の作用機序に関する知見は未だ明らかでなく、したがって本症の化学療法を適確、且つ合目的的に行なつた根拠に乏しいうらみがあつた。T, V, 感染症の治療に関する基礎的研究の一つとして今回は抗原虫性物質のT, V, 自体の呼吸並びに解糖能に及ぼす影響を観察し、2, 3の知見を得たので報告する。

使用したT, V, は吾教室保存の継代純培養のもので遠沈洗滌したものを用いた。解糖能は Warburg 装置を用い窒素ガスを充てんし、恒温槽にて一定時間反応せしめ、その乳酸産生量を Barker-Summerson の乳酸定量法で測定した。又虫体呼吸は同じく Warburg 検圧装置を用い酸素消費量を測定した。

一方酵素的に Sonic-Oscillator にてT, V, の無細胞浸出液を作製、Le Page 等の方法にならい、種々の助酵素を加えた所謂“完全系”について上記と同様の実験を行なつた。抗原虫性物質としては Trichomycin, Aminitroazole, 8823 RP, K-2880等を用い、これらの乳酸産生、酸素消費に及ぼす影響につき比較検討した。

55. (演) 腔トリコモナスの治療に対する新薬

(日医大第二) 網野栄作, 千田智勇, 伊藤英雄
高橋善次郎, 代田治彦, 中村純一

私達は抗トリコモナス剤の試験管内での効果と臨床効果を多数の薬剤について検討して来たのであるが、これら薬剤は大別すると抗生物質と化学薬剤の2種に区分される。